

# 朱子学と陽明学

—— 三島中洲の思想詩をめぐって ——

松 川 健 二

## (一)

おぼんでございます。今紹介いただきました松川でございます。今春東洋研を預ることになりましたですね、この秋の講演会というのが性格としては最終講義的な意味合いも込められたものであると体験的にここ数年そう思っております、それが急に私がやるようになった、自ら決めざるを得なくなったといったようなことで。

今日の演題でございますけれども、そういうことで殆ど準備のないままにポスター作りというようなことになりましたですね、苦し紛れにただ「朱子学と陽明学」と出しておけばそのうちに何か理由付けと言いましょるか、自ら解決するであろう、というふうに思っております。そのうちにあれこれ日も迫りましてですね、少しこれは準備しなくてはいけないと、この数日は何かとあ

ったものですから……そのようなことで、今日のこのためにですね、B4の紙一枚とそれからB5の紙一枚、(末尾に付載の資料一及び資料二)これ取り急ぎ作ったわけです。

「朱子学と陽明学」なんて言う、目茶苦茶に大きな題を掲げておきましたですけども、いづれは絞ることになるだろう、ということ。そこにございますように、今B4の紙の一番左側にですね、今日の日付と共にサブタイトルとしまして——三島中洲の思想詩をめぐって——という具合に載せておきましたので。まさに今いろいろ紹介いただきましたけれども、そんなに広げてものというところで、手掛かりと申しましょうか、何かやはり話を具体化して、漠然としたことでは、といったような気持ちでございましてこういうことに致しました。それと今一つお話ししておきたいこととしましてはですね、我々東洋学研究所ではこのちょうど一週間前に戸川先生にお願いしたわけですが、私はとても及びませんけれども、いづれにしましてもテープを起こしましてですね、そ

資料の使い方でございますけれども、もっぱらB4の紙の算用数字①から⑳まで打ってある、その順序でお話を申し上げて行きます。時あっていま一枚のB5の小さい方の紙に及ぶ時はそのようにお話致します。

す。『論学三百絶』これはあまり普段は見かけない資料なんです。私もこちらに参りましてから何かある筈だ、というような気持ちで、ここでは旧書庫のようなものでしょうかね、何かあと図書館長室に別置されている中洲関係の希覯に属するようなそういう書物ですね、その中に非常に薄い物で『論学三百絶』というものの、これは活字排印本であります、それを鋏と糊で張り付けたもので。

このまず一番最初の、

（『論学三百絶』資料①）

中洲の太極論。これは我々儒家思想をやっております者の、宇宙論とか存在論とか本体論とか、といったような分野での主要な切り口に太極論がございますけれども。これ甚だ明快でございまして、今の詩にありますように、中洲の太極論は太極即一元氣の一語に尽きることです。太極というののもと言うまでもないことですが『易』の繫辭上伝、これは算用数字の②になりますか。

是の故に易に太極有り、是れ兩儀を生じ、兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。

（『易』繫辭上伝 資料②）

という、まだ続きますが、儒家的な存在論の根本概念がございます。

第三句の「講究して徒らに分析の言を為す」と言うことに關しましてはですね、第三句この「分析の言」と表されるこの一端は、別途次のようにも詠われます。③の資料でございます。

易言太極老無極 易は太極を言ふ 老は無極

茂叔混同為一極 茂叔は混同して一極と為す

比較試將禪理論 比較して試みに禪理を將つて論ぜんに

色如太極空無極 色は太極の如し 空は無極

（『論学三百絶』 資料③）

この詩に關しましては、暫くまさに「分析の言」を續けておきたいと思ひますけれども。第一句、存在の本源として『易』の太極でこと足りておりますものを④の資料のように『老子』二十八章では、

其の白を知りて、其の黒を守れば、天下の式と爲る。（天下の式と爲れば）常德<sup>たか</sup>忘<sup>わす</sup>はずして、无極に復歸す。

（『老子』二十八章 資料④）

という、無極と言う概念が提示されているという具合に中洲先生はおっしゃるのです。第二句「茂叔は……」これは周敦頤、周濂溪。周茂叔ですね、字でございまして、南宋に至って朱熹、朱

子が「無極而太極」という、この五文字で始まります北宋周敦頤の「太極図説」に「太極図説解」と解を付して顕彰致しました。宋学の基本文献の一つに数えましてから、このテーマは思想家の主要な論題となつてまいりました。資料の⑤を御覧ください。『朱文公文集』の卷三十六、陸象山の兄、梭山に対する書簡で言っているんですけどもね。

無極と言はざれば、則ち太極は一物に同じて万化の根本と爲すに足らず。太極と言はざれば、則ち無極は空寂に淪<sup>し</sup>みて万化の根本と爲る能はず。（『朱文公文集』卷三十六 資料⑤）

これなかなか微妙なところを言っているわけですね。朱子のこれは……ダジャレにもなりませんけれども、朱子の言わんとする趣旨と言うのは（笑）無極の語によって太極の本質が形容されている、とここを解しているわけです。事実このような解釈の機微の上に朱子の存在論は成立しているのですけれども。そのところ我が学祖三島中洲先生は「茂叔は混同して一極と為す」こう批判的に詠ずるわけであります。「万化の根本」として『易』の「太極」のみで十全であるところ、周敦頤のもの、それから朱子のもの、これは『老子』の「無極」と混同してしまい、軸足を老莊に移してしまった、とこう批判するのですね。これは物凄い大きなテーマでして、もとより「自無極而為太極（無極自りして太極と爲る）」といったような「自」の字が入っていたり「為」の字が入っていたり、これテキストの問題ももちろんございますけれど

も、今は問わずしておきましょう。いずれ中洲は朱熹的理解のものを老莊に傾く、とこう判断しているわけでございます。

起・承と述べましたので転句・結句に移りたいと思いますが、これに関しましては中洲自身の次の一節を併せ考えてみたいと思います。これ以降同じような排印のこの書物、これは『中洲講話』というものです。同じスタイルのものが⑥それから⑮それから⑳・㉔・㉘といったように並んでおりますけれども、これ全て同じ本からの、中洲先生の講義録……じゃなくて、講演記録ですね、講演記録というもののなんです、その中に「崇神論」というものが早い時期にありますけれども、これやはりそうですね、折角資料を出しておりますので、転句・結句についての、これは詩を作った中洲先生自体に語らせるのが一番いいわけですね。

莊子に自三其異者二視之、肝胆楚越也、自三其同者二視之、万物皆一也、とありて、天地万物は元來渾然たる一大物のみ、其の中に就て、人間が分析して異名を付ける迄なり、故に諸学派の極度は皆一に帰せざるものなし、儒學にて申せば、太極の一元氣が陰陽に分れてより、六十四卦三百八十四爻の變象となり、千差万別、窮極す可からざれども、畢竟太極は此の千差万別を總括したる名にて太極より内へ分れ出で千差万別したるに非ず、到底一太極に歸するなり、老莊が虚無を主張すれども、無より有を生じ、有が復た無に歸すると云へば、有無は對待の仮り名にて、有無を合すれば絶対なる自然の一

道に歸着す、

その「自然の一道」の「自然」のところあたりにちょっとサイドラインをつけておいていただきたい、と思います。後でちょっとふれることになろうかと思っています。

仏氏が空と色とを分説すれども、空即是色、色即是空と云へば、詰り空色の對待を離れて、絶対なる真如の道に歸着す、然れば儒老仏が銘々の流儀の眼より見て、太極とか自然、この「自然」も同じような意味ですね。

とか真如とか、各名目を附けたる迄にて、依然たる天地万物の一大物に外ならず、(以上、『中洲講話』崇神論 資料⑥)と言う。これは「崇神論」の一節でございますけれども。私この③の詩の理解のためにこの「崇神論」を今掲げたわけですが、つまりこの「崇神論」のこの一節は、相對の觀點と絶対の觀點の相違を言っているのでありまして、太極に即して言えば、絶対の立場に立てば「太極」、相對の立場に立てば「陰」「陽」という、こういう相違となりましてですね、真如に即して言えば、絶対の立場に立てば「真如」、相對の立場に立てば「空」「色」の相違となる、と中洲は言っているわけです。で、一元氣たる「太極」に相對するものではなく、「太極」は絶対のものである、ということとを彼言っているんですけれども。このままの形では「空」と「色」は相對のものということになってしまいます。思うに、この③のこの「易言太極老無極」詩のですね、起句の「太極」も中洲にとって

はそのような絶対のものなのであること、先にみた通りであるとしますれば、結句に於ける色〓太極、空〓無極、という相対的設定はこれは自らに論理矛盾があると言わざる得ません。安易な発想と言わざるを得ないでしょう。いずれにしましてもこの詩「茂叔混同為一極」という第二句に注目して論を進めたいと思います。

### (三)

さてこの老荘と宋儒を結び付ける中洲の基本姿勢は、⑦の詩により明らかです。

理先氣後老莊学 理先氣後は老莊の学

理後氣先儒者学 理後氣先は儒者の学

朱承老莊王承儒 朱は老莊を承け 王は儒を承く

専論斯氣是禅学 専ら斯の氣を論ずるが是れ禅学

(『論学三百絶』 資料⑦)

こうございますね。かなり踏み込んでまいっておりますので、もう一回確認のために、翻って朱熹の太極觀を引き続き考察しておきますと、これは⑧のようにですね、『周易本義』の繫辞上に、一毎に二を生ずる、自然の理なり。易は陰陽の変、太極は其の理なり。

(『周易本義』 繫辞上 資料⑧)

とございます。これは資料算用数字の②のですね、「是故易有太極、是生兩儀……」と言う、この繫辞上ですね、この文に朱子

がこれに『周易本義』の形で注釈を施したものに他なりません。これ割注の形でこのように載っている。でこの特徴はですね、これは中洲先生が批判してやまないことですから、こう申しまして、「太極」というものと「理」というものを同定するわけですね。中洲は「太極」は「氣」と言いますけれども、この場合朱熹はまことに「太極」は「理」というものと重ねて、ですから従って「繫辞伝」の「太極」と「兩儀」この順序次第は「理」と「氣」の関係に置き換えうるわけでありまして、中洲はこれをこの詩で「理先氣後」と表現したのであります。そういうわけで、先の「易言太極老無極」という詩、③の詩ですね。この詩に周敦頤とか朱熹が「太極」を「無極」と混同して老莊に傾いてしまったということを指摘したその同じ線上に起句「理先氣後老莊学」と提示されたわけであります。これら周敦頤にまつわる道家的雰囲気についてはよく指摘されるところでありますけれども、この中洲先生による「理先氣後」一般を老莊的なものとする見方は大胆と言わなければなりません。

対して承句「理後氣先」は「氣先理後」と同義でよからうかと思いますが、これが儒であると中洲は言うのであります。よく中洲は好んで「有物有則(物有れば則有り)」、この四文字を『中洲講話』の到る所に出してまいります。この語を使うのを常と致します。『詩経』とか『孟子』に出るこの「有物有則」これを「物先理後」物が先で理が後の意として彼は活用するわけですけど

も。これがまさに中洲にとっての儒なであります。そのような設定からいけば、彼にとっては周敦頤とか程子兄弟とか朱子とかいったような所謂新儒学は排除されることになります。

今、B5の紙ですね。ここでちょっとそちらに目を移していただきたいんですけれども。これはやはり同じ『中洲講話』の中にある「仁斎学の話」という、この一番右側のね、これあの御講演の時に恐らく、何か紙にでも書いて張り付けたものでもありませんか、御自分が話をする時、それを構図の形で、一種のこれは思想史の構想でありますけれどもね。気学はこれこれこう、人造学はこれこれこう、理学はこれこれこうという、そういう形です。ですからあの思想史の授業をね、中国思想史ですよ、お取りになったような方の場合ですね、この周子以下のところ、理学に土台老荘を入れるっていうのはね、いかがでしょう。それストレートにその系譜になると言う。その左側の文、それがこの構図の説明の文の一端なんですけれども。こちらに来てこれを最初に見ましてですね、これはいろんな意味で、おもしろい“という風に。それから暫く中洲の文を読む機会が与えられてですね、やっと最近この半ばは受けられるか、肯定できるか、といったような気持ちになってまいりました。ですから私、陽明研も預らせていただいております、雑誌『陽明学』の編集に携わっておりますけれども、その表紙裏にですね、この表を二・三年前にこのまま掲げた記憶がございます。それ程ユニークなものです。このB5

の紙も時々御覧になっていただきながらお話を続けますので、お聞き取りいただければと思いますが。

この詩の転句ですね「朱承老荘」という部分がございますけれども、これは中洲の太極観ないし理気観の然らしむるところであることは今まで申し上げた通りでありますけれども。関連する中洲の言説を先程のB5の紙以外に一つ引いておきますと、⑨のようなことでね、これは「義利合一論」。中洲先生「義利合一論」で専ら喧伝されておりますけれども。その中にね、

宋儒は、太極の一理よりして天地万物を生ずるとて、理気を先後に分けて説けども、余は取らず、

（『中洲講話』 義利合一論 資料⑨）

とある。これは出しておりませんけれども、別のところでは、朱子学が嫌いになってきたとかね、といったような、そうも述懐しておられる、そのことの一端であります。

この詩の転句、第三句「王承儒」という部分の箇所の解説も必要とするところがございます。となれば王陽明の太極観を窺っておかなくてはいけません。『伝習録』の中巻の「答陸原静書」ですね。資料⑩でございますけれども。

太極生生の理は、妙用息むこと無くして而も常体易らず。太極の生生は、即ち陰陽の生生なり。……若し果して静にして而る後に陰を生じ、動にして而る後に陽を生ずれば、則ち是れ陰陽動静、截然として各自に一物と為る。陰陽は一気なり。

一氣屈伸して陰陽と為る。動靜一理なり。一理隱顯して動靜と為る。

（『伝習録』 中巻 答陸原静書 資料⑩）

と、こう答えるところによりますと、陽明先生、王陽明、王守仁はですね、太極即陰陽と考えていることが解ります。

またその王陽明の理氣説は同じくこの「答陸原静書」のちよつと前のところにあるのですが、資料⑩、

来書に問ふ、前日精一の論は、即ち作聖の功なるや否や、と。

こう質問があったけれども、私にいわせればこうだ。これ比較的名なところですけども。

精一の精は理を以て言ひ、精神の精は氣を以て言ふ。

その次ね、

理は氣の条理、氣は理の運用。条理無ければ、則ち運用する能はず。運用無ければ、則ち亦以て其の所謂条理なる者を見ること無し。（以上『伝習録』 中巻 答陸原静書 資料⑩）

という場合のこの「理者氣之条理、氣者理之運用」と言う対句表現、これはあくまでも対句表現でありますから、これで一對となるべきところ、これはこの中洲の文章を読み直すと、基礎資料を読みますと、どなたも感ずるところだと思えますけれども、好んで前者即ち「理者氣之条理」のみを独用致します。それだけを摘んできて使うんですね。それはちょっと板書致しました「有物有則」をしきりに用いることと類します。中洲の所謂「王承儒」とはこのような意味合いを持つものなのであります。

以上中洲の陽明学理解というものは、理氣論という「心学」としてはまさに副次的なテーマの上には成り立っているということを確認しておきたい。陽明学と言えば、やっぱり誰が見ても心の学問ですね。それをともかく理氣論で陽明学を彼は理解し、そしてそれを応用し、いろいろなものに援用していくという、それがこの中洲思想の大きな特徴であります。

#### （四）

氣学として陽明学を捉えるという、中洲の陽明学理解の特異性を明確にするために、通常心学としての陽明学の先駆的存在と目される陸象山、先程ちょっと話が出ましたけれども、象山に関する中洲先生の詠じた詩を扱っておきたいと思えます。⑫の詩でございますけれども。

四海万形皆貫通 四海の万形皆貫通す

象山悟道古今空 象山道を悟る 古今空し

悟った以下は「古今空し」の悟った内容だと思えますね。

東西南北聖人出 東西南北 聖人出づるも

畢竟斯心斯理同 畢竟斯の心 斯の理同じと

（以上、『論学三百絶』 陸象山 資料⑫）

この詩の作られたその下敷きの文章、これはよく知られる陸象山の断案であります、⑬の文章ですね、これを意識して作ってお

りますね。

四方上下を宇と曰ひ、往古來今を宙と曰ふ。宇宙は便ち是れ吾心、吾心は即ち是れ宇宙。千万世の前、聖人の出づる有るも、此の心を同じうし、此の理を同じうす。千万世の後、聖人の出づる有るも、此の心を同じうし、此の理を同じうす。東南西北の海、聖人の出づる有るも、此の心を同じうし、此の理を同じうするなり。

『象山先生全集』 卷二十二 雜説 資料⑬

これは「雜説」の中にある言葉ですけれども。所謂陸象山の思想、陸九淵の思想を一言で言えば、やっぱり「心即理」でしょうね、その基になっているもの。で、これをこの讃えておりますことは明らかであります。で、第三句の「古今空」とは一体どう言う意味か。これは「心即理」の立場から人間的価値を論ずれば、古今の差等は無視してよい、という意味であります。類似的資料はいろいろ出すことはできるんですけども、まさに彼陸象山の言葉にですね、經書と吾心とどちらが大切といったなら、当然にも吾心が大切だね。經書などというのは心の註脚に過ぎないわけですから、「堯舜之前何書可読（堯舜の前何の書か読む可きや）」（『象山先生全集』 卷三十六 年譜 淳熙二年）。結局經書がなかったら指針になすものがないと言え、堯舜以前の人達經書がないわけですから吾心以外に寄るべはない、ということになりますよね。そういうこと「古今空」とは。古を尚ぶ、といったような

ことではなくて、全て人間として心が有りさえすれば、理が備わっておりまして価値は同等、こういうことにつながる思想であります。

今、陽明の学問が普通「心学」と考えられているということから、陸象山の「心」を詠ったものを出したんですけれども。これ王陽明のものの中からですね、素材を捜せば、もちろん心学ですから、良知にらんで心に結び付くものは物凄く多いわけなんですけれども。中洲先生はそれは一顧だにしないんですね。一顧だにしない。理氣論ばかりです。偏りと言えはまさに偏りかも知れませんがですね。⑭の詩、

古人何必勝今人 古今何ぞ必ずしも今人に勝たん

各自胸中有聖人 各自の胸中に聖人有り

倣仏不須証伝授 仏に倣ひて須ひざれ 伝授を証するを

乘彝道統在人人 彝を道統に乗るは人人に在り

『論学三百絶』 資料⑭

これなんかはまさに陸象山の心学をこそ評価しているものでありまして、陽明の心学に対してのそれとは全然理解を異に致します。そのような陸象山の心学を語ると言う意味ではですね、⑮のように、これ「学問の標準」とありまして、陸象山の学問の標準ということに言及したことですけれども、

陸象山は、中庸の尊徳性<sup>ト</sup>に本づき、天より受けたる尊徳を尊び養ふことを主とし、道<sup>ル</sup>問学<sup>ニ</sup>することは第二とし、六



経は我心之注釈……

先程ちょっと触れましたけれども、

と看做す学派にて、

ですから、ここまで言っていただと非常に私も安心するんですよね。陸象山の中の心の重さというものには、十分このように紹介の労を惜しまない。それが、

後世陽明学の端緒を開きたり、

こう言いつつ結局は、

故に尊徳性の三字は、陸子学の標準なり、

(以上、中洲講話) 学問の標準 資料⑮)

と言うことで、私もでもしたら「心即理」が陸子学の標準ということになりますけれども。必ず思想と行動を重ね合わせてね、このような方向にもっていくのがこの三島中洲の特徴なんですね。こんな風に陸学を紹介なさいます。心の六経に対する優位性はこれをこのように認められます。

しかし心一般についての中洲の信頼はということになりますと、この詩であってもですね、尊徳性云云というような形で相対的に低い事実は確認しておかなければならないと思います。つまり⑮のこの詩でございませうけれども、

天理存心思則得 天理は心に存し 思へば則ち得  
何須高遠遠人寰 何ぞ須ひん 高遠に人寰より遠ざかるを  
習而不察真名語 習ひて察せずとは真に名語なり

朱子学と陽明学

道在家常茶飯間 道は家常茶飯の間に在り

(『論学三百絶』 資料⑯)

こう詠しながらもですね、一方では⑯のように、

摸理心中不可求 理を心中に摸するも 求む可からず

「心即理」の立場からいけば、こんなことは言えることじゃありませんわね。

要無私欲一毫留 私欲の一毫も留ること無きを要す

物来忽爾天君出 物来れば忽爾として天君出で

隨時従時相応酬 事に随ひ時に従ひて相ひ応酬す

(以上、『論学三百絶』 資料⑰)

と、こう心に於ける私欲、私の欲ですね、その比重の大きさを意識するのであります。先に中洲が象山を「六経は我心之注釈と見做す学派にて、後世陽明学の端緒を開きたり」と評したところは、既に見たところでありましたが、心学としての脈絡を後付けようとしたのではなくて、繰り返しになりますが「尊徳性」による修養論上の脈絡にかかわって発言したのであること、これは再確認しておきたいと思ひます。

## (五)

で、次に移ってまいりたいと思ひますけれども。このように心はさて置き、理気論を柱にする中洲の陽明学理解というものは、

その修養論の面に色濃く反映致します。⑮の詩です。

格致両言争訓詁 格と致の兩言に訓詁を争ひ

宋明学者枉多忙 宋明の学者は枉げて多忙なり

唯推誠意拡充去 唯だ誠意を推して拡充し去けば

效果終成絜矩章 效果は終に成す絜矩の章

（『論学三百絶』大学 資料⑮）

「格と致の兩言に訓詁を争ふ」歴史的事実ですね。このように「宋明の学者は枉げて多忙」、中洲に言わせればこのことはあまり意味がない、みたいな感じになりますね。ですから第三句のように「唯だ誠意を推して拡充し去く」、その効果は「終に成す絜矩の章」、「大学」の末章のあの理想的境地に集約される、という詩のようです。

今日は「朱子学と陽明学」という大きな対立するテーマを出してあります。これ違どこにあるかと言えば、片一方は「理学」で、片一方は「心学」ですね。普通一般の解説書なんかは「心学」と書いてあって「理」と「心」の問題。そこから考えると「気学」というのは当然にもこれは広がりとしてあるわけですけども。修養論の問題では、先程ちょっと触れましたけれども、徳性を重んずるか、問学に道るか。朱子学であれば分析を重んずるけれども、陽明学であれば拡充とか。こう全てのものを分析してそれから帰納的に一つの結論に、これが朱子学の態度でありますけれども、陽明学は一旦豁然貫通したその心の理を尺度にして演繹して

いく方向性、確実に違います。いろんな言い方、あれこれと、内修・外修みたいなね、朱子学と陽明学というものを比較する時言えると思いますけれども。今この⑮のですねこの「格と致の兩言に訓詁を争ふ」これも大きな対立の一つですね。その違いといったら片一方「性即理」に対して片一方「心即理」といったようなそういう言い方より、より具体的にね、この「格」「致」の問題ですね、ここところに朱子学と陽明学の違いを見出だそうと、これはごく見易い代表的な事例だと思います。今私この詩のですね「格と致の兩言に訓詁を争ふ」ということをちょっと敷衍して、⑮・⑳・㉑・㉒とそれぞれ『大学章句』と「大学問」それぞれ比較できますように、しやすいように、これはまあ専門的にやっておられる方は、あまりにも周知に属するごく普通の資料だと思いますけれども。まあこんなようなことも一つ確認しておけば、といったようなことで。概説書などにも書いてありますように『大学章句』即ち朱熹のもものでは、

格とは、至なり。物とは、猶ほ事のごときなり。事物の理に窮め至り、其の極むる処到らざること無からんと欲するなり。

（『大学章句』 資料⑯）

これが「格」の字のあるべき訓であると言うのですね。これはですから対象物に向かってこちらから、真理は外物にあるとしてこちらから歩み寄りそちらに至るんですね。そういうような分析の結果そのようになるという。これに対して㉑、王陽明の方の「大

学問」ではどうかと申しますと、

格とは、正なり。

これもどなたも御存知のことでありませうけれども。「至る」ではなく「正す」ということなんだと。

其の不正を正して、以て正に帰するの謂なり。其の不正を正すとは、悪を去るの謂なり。正に帰すとは、善を為すの謂なり。夫れ是れを之れ格と謂ふ。書に……

ところでこの場合は、

上下に格る、文祖に格る、

と言わなくてはいけませんですね。でも

其の非心を格す。

というのは、これは格さざるを得ませんね。非心に格るでは困る。ですからこの訓詁について言えば、今「大学問」では朱子的な「格的なものもあるけれど、「格す」というものもある。というように、

格物の格とは、実に其の義を兼ねるなり。

(以上、「大学問」 資料②)

と、というのが陽明の理解でありまして。このようなことも含めて大きく公式論としてはですね、朱子学では「格る」陽明学では「格す」ということになりましょう。これが「訓詁を争ふ」の事実の一端でありますね。

それから「致知」とか「致良知」とかね、「致知格物」の「致」。

「致」に関しましては「推極」と言うのが朱子の『大学章句』の中にありまして、

致は、推極なり。知は、猶ほ識のごときなり。

識か識か、あるいは分れるところかも知れませんが。

吾の知識を推極して、其の知る所尽くさざる無からんと欲するなり。

(以上、『大学章句』 資料②)

というのが、「致」の意味であります、②のこの「大学問」の方、陽明学ではですね、

致知と云ふ者は、後儒の所謂其の知識を充広するの謂の若きに非ざるなり。吾が心の良知を致さんのみ。

(「大学問」 資料②)

こういう朱と王の対比、これをピークとしまして、まことにその「訓詁を争ふ」その実態はですね、これはまことに多彩であると言わねばならないのですが。

そこで今この詩にあります「唯だ誠意を推して拡充し去けば」の部分、思想史上この転句のように実践の工夫として「誠意」重視の方向に論を展開するのは、いわば陽明学展開の軌跡の主要なパターンの一つではありました。陽明学といえば「誠意」である。「致良知」でもない「心即理」でもない。「誠意」の工夫というものをね、一番言うに簡潔、行うに容易であらうというような、これ程確実なものはないといったようなことを。これは一つの思想史展開の中でよく言われることでありますけれども。この中洲

自身の理解を「陽明四句訣の略解」という、②に引いておきました、そこに見ておきましょう。繁を厭わず、字づらを辿ってまいります。

陽明学は誠意を以て学問着手の始めとす、故に大学を古本通りに六条目とし、誠意を六条目の始めとす、而して致知格物は誠意中の工夫と為す、朱子は致知格物を学問着手の始めとし、六条目の前に此の致知格物を加へて八条目と為す、然るに古本には致知格物に伝なき故に、朱子自身の補伝を加へ、之を新本と云ふ、是れ亦朱子と陽明と学問着手の異なる処なり、而して其本源は矢張り理氣の見方の異なる処より来るなり、

このあたりなんですよ。この朱子学と陽明学の違いつていうのね、意識すると必ず根底には理氣説の相違があるという。話をそちらの方にもっていく。

何となれば、朱子は理を主とせらるゝ故に、致知格物を窮理のことに解し、窮理より入り、然る後に行に及ぶ、行は働きにて固より氣に属す、陽明は氣を主とせらるゝ故に、行より入り、然る後に理を求む、蓋し意を誠にせんとするは行なり、

(以上『中洲講話』 陽明四句訣の略解 資料②)

ですから誠意正心の「誠意」からと言う。『大学』の八条目・六条目、そのことをまさに『古本』を重んずるという立場、そのまを今言い立てるわけですけども。あくまでもここで注目しな

いといけないのは、やはり中洲はこのような修養論を語る場面にですね、陽明学を「氣学」として氣の学問として捉えている。時どきこちらB5の紙の方の右側の構図に二度三度目を向けていただきたいんですけども。「陽明は氣を主とせらるゝ故に、行より云云」と言うそのことと、B5の紙とのね、重なりを確認していただきたいんですけども。この陽明学を「氣学」として捉えるという事実、これはいくら強調しても強調し過ぎということはございません。理氣論が根底にあります、そこから説き起こすその姿勢というものは、まさに中洲先生一貫しているんですね。で、従って中洲は王陽明の「学問の標準」として④のように述べます。これも辿っておきましょう。

王陽明は之を慨き……

と言うその文脈は、これは反朱子学の立場からということを受けていくんですけども。

陸象山尊「徳性」の学に基き、実行を主とし、学知を後にす、故に大学の古本を奉じ、誠意より先づ着手する学派を開けり、其説は人の発意を誠にし、行ひ遂げんとすれば、先づ我が天然の良知を致し窮め、発意の善悪を知り分けるに在り、然れども其知り分けたる善を行ひ、実物を格すに非ざれば、真の善なるや否や分らず、……

このあたり中洲らしいですね。

故に致知は在ス格物と解し、其発意が果して善なれば、物

を格すこと出来る、之を知行合一とす、

この知行合一も、これもこのように説明されれば、それはそれで一つの説明ということになりましょう。

知行合一すれば最初の発意を誠にすること必ず出来ると解き、致知格物は必竟誠意中の工夫とす、それより正心修身齐家治国平天下に至り、朱子の八条目を六条目と改む、……

先程の②③と重複するところがありましたけれども。

故に誠意の二字が王学の標準なり、

陽明の学問を「致良知」と言わずに「誠意」がその学問の標準、中心、土台なんだという。

然るに致知の知を良知と説き、朱説と異なる故に、世人を呼醒する為め、口癖にも、良知々々と唱へらるゝ故、……

これ一般の陽明学者がそう。

世に王学を良知学と稱すれども、寧ろ誠意と云ふ方が陽明の意を得たり、（以上、『中洲講話』 学問の標準 資料②④）

といったことでありましてですね、この結句に「絜矩」が掲げられたのはこれダジャレにもなりませんかね、（笑）「絜矩」が掲げられたのはこの一首が『大学』を主題としたことの結果であろうかと思えますが、やっぱり『大学』を素材にしていますと、そういうことにはなろうかと思えます。いずれにしても、今この②・④を直接読むことによってですね、中洲先生の講演そのままのものの筆録でありますから、おっしゃることの一貫性と今一

つ特殊性に関してそれぞれが御理解いただければと思います。

## （六）

さて、このように良知の学ではなく誠意の学として、陽明学を捉える中洲にとってみれば当然、誠意と良知並べるといえば、比較相対的に良知の価値が下回るようになりますよね。それはま受理の当然。で、⑤の詩のようにですね。

良知一覚照乾坤 良知一たび覚りて乾坤を照す

拔本塞源功可尊 拔本塞源 功尊ぶ可し

良知一たび覚醒しましては、この最高至上の靈性これが乾坤を照らすと。「照」の字を自動詞のような形で「乾坤に照る・照やく」と言うようなことだってあるいはいいのかも知れませんですね。

「拔本塞源論」にございますけれども。先程ちょうど、えと今日本曜日で……上の505の大教室でちょうど今「拔本塞源論」読み終わったところでした。何回もかかりましたけど。三回か四回かかかりました。読み終えたところでまだ私自身その志操、志の高さにね、何か先程一瞬ちょっと酔った感じが致しましたけれども。その功しは尊ぶべし、とこう申しますので。これはこれでね、中洲先生そのことの意味は十分に重く受け止めているわけですね。受け止めてはおられますけれども、次のですね、第三句に目を転じていきますと、これはまた少し辞別けてものを考えな

いといけないだろうと思います。

天仮数年精訓詁 天 数年を仮せば訓詁を精にし

洗除捏造宋儒言 洗除せん捏造の宋儒の言を

(『論学三百絶』 伝習録 資料⑤)

こういうものに続くんですね。全体通して読み解いてみますと、致良知説というものはまさに発展途上の存在なんですね。五十歳で亡くなった陽明にもう少しまあ何でしょうかね、労咳、肺病の特効薬でもね、あって(笑)病気が治って六十・七十と余命が延び「天数年を仮せば訓詁を精にす」これは良知説、致良知とは申しましたが、一種の『孟子』に対する訓詁の学問と。良知・良能のね、利用の仕方の問題ではありますが。そのようなことで、もう少し違ったものの言い方をしましてですね、「捏造せる宋儒の言を」洗除したであろうに惜しいことだ、と言ったわけですね。そうしますと、これから可能性を秘めつつ亡くなった王陽明の無念を思うなんて言うのは、ちょっと思いやりに過ぎるかも知れませんが。まあ言ってみればまさに発展途上の存在なんですね。で、より時間さえあれば説得力のある命題が提出されたであろう、こう言っておりますね。この中洲先生、氣学としての陽明学であってみれば、唯一、何回か申しましたが「理は氣の条理」のみでは心もとないわけですし、ないしは陸象山の「心即理」、陽明先生もこれは言いたててやまない。「心即理」というテーマの頻出することは『伝習録』を紐解く人はどなたも感ぜられるところだと

思いますけれども。この「理は氣の条理」とかね、「心即理」をこえる命題が期待されていた、という具合に考えていいと思います。数年の余命に期待されていたものは理学的・心学的傾向の払拭に他ならなかったんです。全ては「氣学」としてより完成度の高い所謂陽明学、これが期待される、という風に。これがこの詩の内容となると思います。従って中洲は次のようにも詠いますね。

⑥の詩でございますか。

古粗今精是自然 古は粗にして今の精なるは是れ自然

この「自然」これちょっと記憶にとどめていただければと思います。先程私「自然」に関しましては⑥の資料で二か所ですね、それからこれは途中で申し上げたかどうか、⑧の資料で「一毎に二を生ずるは、自然の理」とありましたが、そのところにもちょっと今お手数ながらサイドラインを引いていただくと致しまして、今⑥のこれで「古は粗にして今の精なるは是れ自然」、この自然の意味はこれはどうも前にでていた「自然」たちとはちよつと違うと思いますね。当然・必然・自然みたいな感じ。「古は粗にして今の精なるは是れ自然」、これ中洲の歴史観というものが決して尚古主義でもなければね、結局は言ってみれば陸象山のように「古今空し」古今の差等がない、というよりはより率直にね、古のものが今のものに劣ると、全く逆転してましてですね、この人類の発展の歴史とでも申しましょうか、これはこのまま「古は粗にして今の精なるは是れ自然」と、で、

折衷衆説成完物 衆説を折衷して物を成完す

誰言王子合儒禪 誰か言ふ 王子は儒と禪を合せ

也似達摩并老仏 也た達摩を似ねて老仏を并せたりと

(以上、『論学三百絶』 資料②⑥)

こういう形ですね、簡単に心学的なものと絶縁することを期待すると同時に、実践の学としての陽明学は、これを中洲は推奨してやまないのです。次はその一例です。②⑦の詩でございすけれども。

傷身失徳背親恩 身を傷り徳を失ひて 親の恩に背く

多欲由来成病根 多欲は由来 病根を成す

養徳養身唯一事 徳を養ふと身を養ふとは唯だ一事と

吾推簡易伯安言 吾は推す簡易なる伯安の言

(『論学三百絶』 資料②⑦)

王守仁。陽明と申しますが、字は伯安。「吾は推す簡易なる伯安の言」ですから陽明のこの簡易思想のね、偉大さと言えば「徳を養ふと身を養ふとは唯だ一事」と、この言葉はこれは『伝習録』にはございませぬ、『王文成公全書』の文録二になりまして「与陸原静」というものの中にこのままでくる言葉です。ですから中洲先生もちろんのこと自分は陽明の徒であるということをして自任しているわけですから、その読書の範囲には、もちろんのこと『伝習録』にとどまるわけでなくてね、当然にも『全集』が入っておりますと目を通されていた。これお好きなようでしてね、こうい

う実践しやすいものね。生活の指針と申しましょうか、②⑧の、これは「修身衛生理財合一論」ですか、

漢学諸派の中にも、尤も実行を主とするは陽明学なり、

故に陽明は合一の説多し、今日の講演も、陽明の言に、養

徳養身只是一事とあるに本づき、敷演したる迄なり、唯理

財の一事を添へたるは、余が発明にて、所謂温故而知新

とは如し此ことなからんかと、自ら信するのみ、

(『中洲講話』 修身衛生理財合一論 資料②⑧)

と、こういうことを言っておられますけれども。これはやはり中洲にとっては空理空論よりはこういう実践のね、指針が具体的に具象的にひとりで示されているもの、陽明の言葉の中ではこういうものを好むと、そういう陽明学に対する姿勢といいたしうか、これは一貫していたと思うのです。

## (七)

で、そろそろ話は終りにもっていかなくてはいいませんが、以上私、中洲にとっての「朱子学と陽明学」とは、といったようなことに焦点を絞って、中洲先生残してくださった思想詩の幾つか、三百のうちのいくつも抜い得ませんでしたけれども、ここで最後に中洲が深く関心を持った陽明以降の思想家たちの中から中国では一人、日本でも一人、一人づつ彼我選びましてそれぞれに寄せ

た中洲の詩を紹介しておきたいと思います。そのことによって今日の恐らく話のまともに多分なろうかと。中洲の描いた、「儒学の本流」を確認するためにも十分の素材になろうかと思うからです。②と③の詩を見てまいります。

よく陽明学の末流というようにです、それこそ誰が指弾したんでしょうかね、「現成良知」だとか。逆に右とってどういうものなのか、帰寂とか修証とかいろいろいわれますが。

王派分爲幾派伝 王派分れて爲る幾派の伝

空言遺実殆帰禅 空言実を遺れ 禅に帰するに殆し

「空言実を遺れ禅に帰するに殆し」、まあ確かに現成良知派の中の禅的なものは顕著であり、高い塀に乗り、左側に落ちれば禅で、右側にとどまれば陽明学といったようなね、そんなようなものも随分にあるかと思うんですけれども。そういう系統と申しますのは「空言実を遺れ禅に帰するに殆し」、こう申しまして、第三句、劉蕺山でありますが、

蕺山晚起救流弊 蕺山 晩に起りて 流弊を救はんとして

慎独工夫入自然 慎独の工夫 自然に入る

(以上『論学三百絶』 劉子全書四首 資料②)

という詩がございますね。劉蕺山というのは劉宗周。最初のこのあたりに関する思想史『明儒学案』を書きました黄宗羲、そのお師匠さん。劉宗周に關しましては、今日は東洋研でのお話でありますけれども、先程も出ました陽明研の方の雑誌『陽明学』で、

来年の三月三十一日が期日の、その特集で、この劉宗周を扱うことになっております。ですから私も含めまして今若い方々でも劉宗周研究早いところ成果を出さなくちゃといったようなこと、今日お見えの方々にも幾人かいらっしゃると思うんですけれども。この劉宗周の出たその思想的意義とかね、いったようなことに関しましては中洲先生もお考えを述べられる。劉宗周がですね「晩に起りて流弊を救はん……」そこどう読みますかね。救はんとしたが「慎独の工夫自然に入る」。それでさっき指摘してきました「自然」の用法・用例に戻らなくてはいけないのですけれどもね。⑥の中で「自然」「自然」と出てきておりましたのは、それは当然老莊風のものですよね、⑥の方ね。それから⑧で出てきた「自然」の謂と申しますと、中洲先生に従えばですね、このB5の紙の10行目かな、「周易を誤解し、理と氣を分離し、動もすれは自然の理自然の理と云へり、」(『中洲講話 仁斎学の話』)と。これはまさに『周易本義』のことを言ってるわけですよね。そうですね。ですからその右側の方の理学には、理学の系譜には老莊から周子・程子・朱子・宋元明間諸儒という風に言っておる。その老莊——自然とこう朱子は考えるものですから、こともあろうに「繫辭伝」の注釈であるところの『周易本義』です、こういう老莊風の解釈をしたと、太極と理を同定したと。これが朱子の非難せらるべき悪しき仕業と、そういうことを言うわけですから、だからこの「自然」は⑥の「古は粗にして今の精なるは



是れ自然」と、この「自然」とは自ら違うと思うんですよ。そうしますとですね、今②⑨の詩の「慎独の工夫自然に入る」の「自然」とは、これは②⑨的な「自然」なのか、ごく当たり前のことを言うね、そういうことなのか。⑥ないし⑧に見られるような中洲の目から見れば老莊風の「自然」ね、っていうことなのか。中洲でありますから「慎独の工夫自然に入る」と言う場合のこの「自然」とは、これは「慎独の工夫」というのが当然必然的に当たり前のことだったという風にいくのか、それとも「慎独の工夫」に思い至ったがそれが残念ながら老莊風のものに流れちゃって、朱子的なものに流れちゃって、今この場合老莊イコール朱子なんですから。全く何度言っても凄いことだとは思うのですけれどもね。そういう具合にもし「慎独の工夫自然に入る」と言って「慎独」のようなすぐれて儒家的工夫というものをですね、これも老莊風のものだという具合にするとすればですね、今第三句と第四句の間は、これは逆説に繋がなくてはいけないと思うんですね。「蕺山晩に起こりて流弊を救ふも、救はんとするも」その捻り出した慎独の工夫というものは、これは依然朱子の系譜から抜け出せなくて、まさに思わしからざるものが提示されてしまったんだ、というね。そういうことになるでしょうし、私はこのところ他の用例からみてもですね、この「慎独の工夫自然に入る」というところの老莊風のものに入っちゃった、という意味でね、こここのところ残念なことだ、という具合に解釈しようと思っているんです。こ

の劉宗周、劉蕺山はですね、普通まさに中洲先生が信頼してやまない誠意の学、これは確かに劉蕺山の命いのちですよね。と同時に「慎独」ということも申します。その前に「克己」、許孚遠というね、劉蕺山のお師匠さんが克己の工夫といったようなことで。それから慎独・誠意という具合にいくようにして。そういうことは今我々の周辺の劉蕺山研究の一環として浮かび上がってきていることですけれども。そのこの話はちょうど十日ぐらい後でしようかね、国学院でお話することになってる「克己の諸相」とかいってそれも苦し紛れに出しておいたんですけれどもね。克己から慎独、誠意という具合にどうも発展展開するようでありまして。さればこそ劉蕺山というのは慎独の学・誠意の学を以て知られるんで。本邦我が日本陽明学にも大きな影響を与えた明末の大儒劉宗周。これに対して讃えて詠ったのか、残念なこともちょっとあるといった感覚で詠っているのか。寄る辺は先に見ました⑥とか、『周易本義』は何番になりましたしょうかね、⑧とかね、これであろうと私は思っております。根拠はないわけではありません。今この「劉子全書四首」とありますですね。ですから劉蕺山関係の詩は四つあるわけです。そのうちの一つだけ今採っているわけですけれども。他にですね一首「空論排……」今これ出しております。次のようです。

空論排來溯道源 空論排し来りて道源に溯り  
専心踐履足推尊 心を専にして踐履するは推尊するに足る

で、第三句はですね、

惜君古訓再興世 惜むらくは君古訓再興の世に

「古訓再興の世に」とは、この王学の流弊に反省が起こって清朝考証学に至るその素地がこの頃にできかかっている、という具合に中洲はとりまして、そういう世に劉蕺山、劉宗周は生まれていながら、

墨守宋儒新造言 墨守せり宋儒新造の言を

(以上『論学三百絶』 劉子全書四首)

先程は「捏造」と言っておりましたけどね。(笑)ここは「新造」、宋儒の新造の言をば墨守してね、自分の学問を展開していった、劉宗周はそうだった。惜しむらくは、というような感じですよ。事実彼の慎独理解といえますのは、そのうちの「独」、独りを慎むというね、その「独」なんかにはどんな解釈彼与えているかという、これも資料には出してございせんですけども「本一物無きの中に<sup>ち</sup>して物物此に具す、至善の統会する所」(『劉子全書』三十八 大学古記約義)といったような、まさに微妙極まりない、そういう意味合いにですね、独りを慎むの独りを解しております。となりますと中洲のようなですね、この「知行合一」とかね「有物有則」的なね、そういう立場から見ればあまりにも観念的に過ぎる、という具合にこの劉宗周の慎独解なども批判の対象になっているんだと、私はここのとこをとりました。「蕺山は晩に起りて流弊を救はんとするも」ぐらいの方がより意味が出ますかね、

救はんとするも」ぐらいの方が無難かも知れませんが。「慎独の工夫自然に入る」。あるいは間違っているかも知れません。でも私は手持ちの資料からいけばそういうことになるかと今は思っております。

で、一方③のこれは我が伊藤仁斎のものでありますけれども。中洲先生の伊藤仁斎に対する思い入れているものは、これは目茶苦茶に深いというか、何か片思いじゃないかと思うぐらい。(笑)このB5の紙ですね、これ「仁斎学の話」ってあるでしょう。伊藤仁斎の学問素晴らしい、っていうこと言い立ててやまないんです。「義利合一論」なんていうのは洪沢栄一に影響を与えた、といったようなことですね、非常に喧伝されておりますけれども。そのもとは中洲先生が学術・学問的な根拠を与えてくれたんだ、というのこれは洪沢の『論語講義』にはっきり表されてありますけれどもね。それがどうでしょう、どこから来たか。「義利合一論」なんていうのはこれは『墨子』とかね、もちろん『易』の「利」の問題とかね、溯ればいくらでも、これは洋の東西を問わずそれに類するような功利主義的なものっていうのは何処にでもあるわけですけども。今この「仁斎学の話」の中でですね、伊藤仁斎の学問は明代の呉廷翰に溯ってそれから先ですね「義利合一論」のこの系譜は陽明ね。凄いですけれどもね。そういう所はあることはある、と。これはまだ私活字には……いずれそれも講演記録のような形で間もなくある雑誌に載ろうかと思っております

し、そのうちに中洲に関しては『氣の陽明学』といった風に銘うちましてね、その思想的特徴を少しまとめて世に送りたいと思っておりますけれども。

今あれこれちょっと予定外のことを申しましたが、この<sup>③〇</sup>の詩でありますけれども、この伊藤仁斎の学問に関しては甚だ中洲は好意的でありまして。主語はこれは伊藤仁斎三首ですから、「伊藤仁斎が……」っていう気持ちですね。伊藤仁斎は、

氣学唱来排理学 氣学唱へ来り 理学を排す

「古学」なんて決して言わないんですね。こういうような言い方。或疑悟入自陽明 或ひとは疑ふ 悟入すること陽明自りするを

陽明の学問を、まあこれは唯一「理は氣の条理」なんですけれどもね実は、それを古学の伊藤仁斎はそれに因縁があって、仁斎の学問のかんりの部分が成立してるんだ、というのが中洲の見方。そういうことに関しては疑問を持つ人もいます。だから「或ひとは疑ふ悟入すること陽明自りするを」。でも自分は陽明学の系譜であると考え、とこう言うんですね。そのことは具体的にこのB5の紙にちゃんと書いてある。そのように、もう中洲先生信じて疑わない。で、そういう疑いを持つ人は、

不識拡充有源本 識らず 拡充には源本有り

良知性発四端情 良知の性は四端の情に發するを

(以上、『論学三百絶』 伊藤仁斎三首 資料<sup>③〇</sup>)

と、ここで良知が出てまいりますけれども。これは先程いろいろ申しましたようにかなり制限的に見なくてはいけないわけで。仁斎自身にも良知あるんですね。それが拡充されてね、そして影響関係があるなしといったそれには多々論もあるだろうけれども、仁斎は仁斎としての一つの拡充したね、天から与えられた良知を拡充したその成果としてのそのような学問の成立があった、という、それを疑う人もいるかもしれないけれども、そういう人達は知識不足なんだ、という内容の詩ですよ。結局、四端の「端」は、朱子学的には「緒」ですけれども、仁斎は「端」を「本」と解するわけですから、「良知の性は四端の情を發する」ではなくて、「四端の情より發する」でしょう。全てあれこれ方々で講演なさっている、その今はこの詩に関して言えば「仁斎学の話」っていうね、このB5の紙のこれが一番この詩の内容を解析するための基本資料だと思うんですね。このようなことで中洲先生としては一貫しているわけです。このように、今日手掛かりに中洲先生の思想詩を扱ったわけですが、理の朱子学」に対しては「氣の陽明学」、氣の陽明学、心じゃないんですね、氣の陽明学を対比するという構図を生涯描き続けられて、この枠組みの中に仁斎を組み込んだ図ということになろうかと思えます。

私のそのような理解が多少とも真実に触れているとすればですね、三島中洲先生のお師匠さんの山田方谷の『孟子養氣章或問図

解』とかですな、なにか山田方谷退隠以降の業績の深まりといったようなものですね。その一部、やはりあればあくまで気学でありましてね。いま『孟子養氣章或問函解』とかね、その一言を申し上げただけでもその学問の特徴が解っていたかと思ひますけれども。由来はやはりそういう所からも来てるのではないかなど。ただ、その思想の深まりという意味ではね、どうなんでしょう。方谷から見れば中洲はやはり後半生まさに世に顕れたお方でありましてね。(笑)ですので鋭さといましようか、深まりとかいったようなことに関しては、それは一步方谷に譲るかも知れませんが、それでも。

私に関しましては、中洲研究、そうです、ちょうど今日御出席いただいております中村義先生の御在職の時、主催なさいましたシンポジウムの時とかですね、これも今日御出席していただいている戸川先生の編まれました雄山閣の御本に寄せたものとかですね、いろいろな機会が与えられてその度ごとに中洲の学問というのは陽明学だというけれども、こういう風な理解を示せばいいのかということ、つくづく考えましたですけども、もう今や疑いなくこれは「氣の陽明学」であると、簡潔にね、その特徴を申し上げることができると思っております。まあ私自身にも、まさに「天仮するに数年を以てすれば」ね、あるいはもう少し説得力のある話ができるかも知れませんが、時間もありません。時間がありますのでこんなことでお許しくださいと思います。

## 資料一（B4の紙）

- ① 渾然太極一元氣 分見陰陽千萬氣 講究徒為分析言 依然太極一元氣  
〔論学三百絶〕
- ② 是故易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦。〔易〕繫辭上伝
- ③ 易言太極老無極 茂叔混同為一極 比較試將禪理論 色如太極空無極  
〔論学三百絶〕
- ④ 知其白、守其黑、為天下式。（為天下式）常德不忒、復歸於无極。（『老子』廿八章）
- ⑤ 不言無極、則太極同於一物而不足為万化根本。不言太極、則無極淪於空寂而不能為万化根本。（『朱文公文集』卷三十六）
- ⑥ 莊子に自其異者視之、肝胆楚越也、自其同者視之、万物皆一也、とありて、天地万物は元來渾然たる一大物のみ、其の中に就て、人間が分析して異名を付ける迄なり、故に諸学派の極度は皆一に歸せざるものなし、儒学にて申せば、太極の一元氣が陰陽に分れてより、六十四卦三百八十四爻の象となり、千差万別、窮極す可からざれども、畢竟太極は此の千差万別を總括したる名にて太極より内へ分れ出で千差万別したるに非ず、到底一太極に歸するなり、老莊が虚無を主張すれども、無より有を生じ、有が復た無に歸すると云へば、有無は對待の仮り名にて、有無を合すれば絶対なる自然の一道に歸着す、仏氏が空と色とを分説すれども、空即是色、色即是空と云へば、詰り空色の對待を離れて、絶対なる真如の道に歸着す、然れば儒老仏が銘々の流儀の眼より見て、太極とか自然とか真如とか、各名目を附けたる迄にて、依然たる天地万物の一大物に外ならず、〔中洲講話〕崇神論
- ⑦ 理先氣後老莊学 理後氣先儒者学 朱承老莊王承儒 專論斯氣是禪学  
〔論学三百絶〕
- ⑧ 一每生二、自然之理也。易者陰陽之變、太極者其理也。（『周易本義』）
- ⑨ 宋儒は、太極の理よりして天地万物を生ずるとて、理氣を先後に分けて説けども、余は取らず、〔中洲講話〕義利合一論
- ⑩ 太極生生之理、妙用無息而常体不易。太極之生生、即陰陽之生生。：若果静而後生陰、動而後生陽、則是陰陽動静、截然各自為一物矣。陰陽一氣也。一氣屈伸而為陰陽。動静一理也。一理隱顯而為動静。（『伝習録』 中卷 答陸原静書）
- ⑪ 來書問、前日精一之論、即作聖之功否。精一之精以理言、精神之精以氣言。理者氣之条理、氣者理之運用。無条理、則不能運用。無運用、

則亦無以見其所謂条理者矣。(同右)

⑫四海万形皆貫通 象山悟道古今空 東西南北聖人出 畢竟斯心斯理同

(『論学三百絶』陸象山)

⑬四方上下曰宇、往古來今曰宙。宇宙便是吾心、吾心即是宇宙。千万世之前、有聖人出焉、同此心、同此理也。千万世之後、有聖人出焉、同此心、同此理也。東南西北海、有聖人出焉、同此心、同此理也。(『象山先生全集』卷二十二 雜說)

⑭古人何必勝今人 各自胸中有聖人 做仏不須証伝授 秉彝道統在人人

(『論学三百絶』)

⑮陸象山は、中庸の尊<sub>二</sub>德性<sub>一</sub>に本づき、天より受けたる尊徳を尊び養ふことを主とし、道<sub>二</sub>問学<sub>一</sub>することは第二とし、六経は我心之注釈と看做す学派にて、後世陽明学の端緒を開きたり、故に尊徳性の三字は、陸子学の標準なり、(『中洲講話』学問の標準)

⑯天理存心思則得 何須高遠遠人賓 習而不察真名語 道在家常茶飯間

(『論学三百絶』)

⑰摸理心中不可求 要無私欲一毫留 物來忽爾天君出 隨時從時相應酬

(同右)

⑱格致兩言爭訓詁 宋明學者枉多忙 唯推誠意擴充去 效果終成絮矩章

(同右大學)

⑲格至也。物猶事也。窮至事物之理、欲其極處無不到也。(『大學章句』)

⑳格者、正也。正其不正、以歸於正之謂也。正其不正者、去惡之謂也。歸於正者、為善之謂也。夫是之謂格。書言格於上下、格於文祖、格其非心。格物之格、實兼其義也。(『大學問』)

㉑致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不尽也。(『大學章句』)

㉒致知云者、非若後儒所謂充広其知識之謂也。致吾心之良知焉耳。(『大學問』)

㉓陽明学は誠意を以て学問着手の始めとす、故に大學を古本通りに六条目とし、誠意を六条目の始めとす、而して致知格物は誠意中の工夫と為す、朱子は致知格物を学問着手の始めとし、六条目の前に此の致知格物を加へて八条目と為す、然るに古本には致知格物に伝なき故に、朱子自作の補伝を加へ、之を新本と云ふ、是れ亦朱子と陽明と学問着手の異なる処なり、而して其本源は矢張り理氣の見方の異なる処より来るなり、何となれば、朱子は理を主とせらるゝ故に、致知格物を

窮理のことに解し、窮理より入り、然る後に行に及ぶ、行は働きにて固より氣に属す、陽明は氣を主とせらるゝ故に、行より入り、然る後に理を求む、蓋し意を誠にせんとするは行なり、(『中洲講話』陽明四句訣の略解)

㉔王陽明は之を慨き、陸象山尊<sub>二</sub>德性<sub>一</sub>の学に基き、實行を主とし、学知を後にす、故に大學の古本を奉じ、誠意より先づ着手する学派を開けり、其説は人の発意を誠にし、行ひ遂げんとすれば、先づ我が天然の良知を致し窮め、発意の善惡を知り分けるに在り、然れども其知り分けたる善を行ひ、実物を格すに非ざれば、真の善なるや否や分らず、故に致知は在<sub>レ</sub>格<sub>二</sub>物<sub>一</sub>と解し、其発意が果して善なれば、物を格すること出来る、之を知行合一とす、知行合一すれば最初の発意を誠にすること必ず出来ると解き、致知格物は必竟誠意中の工夫とす、それより正心修身齊家治國平天下に至り、朱子の八条目を六条目と改む、故に誠意の二字が王学の標準なり、然るに致知の知を良知と説き、朱説と異なる故に、世人を呼醒する為め、口癖にも、良知々と唱へらるゝ故、世に王学を良知学と稱すれども、寧ろ誠意と云ふ方が陽明の意を得たり、(『中洲講話』学問の標準)

㉕良知一覺照乾坤 拔本塞源功可尊 天假數年精訓詁 洗除捏造宋儒言

(『論学三百絶』伝習錄)

㉖古粗今精是自然 折衷衆說成完物 誰言王子合儒禪 也似達摩并老仏

(『論学三百絶』)

㉗傷身失德背親恩 多欲由來成病根 養德養身唯一事 吾推簡易伯安言

(同右)

㉘漢学諸派の中にも、尤も實行を主とするは陽明学なり、故に陽明は合一の説多し、今日の講演も、陽明の言に、養<sub>レ</sub>德養<sub>レ</sub>身只是一事とあるに本づき、敷演したる迄なり、唯理財の一事を添へたるは、余が発明にて、所謂溫<sub>レ</sub>故而知<sub>レ</sub>新とは如此ことなからんかと、自ら信するのみ、(『中洲講話』修身衛生理財合一論)

㉙王派分為幾派伝 空言遺実殆婦禪 蕺山晚起救流弊 慎独工夫入自然

(『論学三百絶』劉子全書四首)

㉚氣学唱來排理学 或疑悟入自陽明 不識擴充有本源 良知性発四端情

(『論学三百絶』伊藤仁斎三首)

(二〇〇一、一〇、一八 朱子学と陽明学 — 三島中洲の思想詩をめぐって — )

資料二（B5の紙）

気学

周公 孔子 子思 孟子 漢唐諸儒 王陽明 吳廷翰

本朝伊藤仁斎 折衷諸學者

人造学

荀子

本朝物徂徠

理學

老子 莊子 周子 程子 朱子 宋元明間諸儒

本朝宋学諸家

理學の理は、色も臭もなく、視聽す可からざる一定の条理を指すものにて、活動力も變化もなき死物なり、死物なるが故に、一定不變なり、故に此の学は天地万物の前に、自然の道理ありて、然後に物か生すると云ふ主義にて、老莊是れなり、老子に有<sub>レ</sub>物先<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>而生とありて、此の物は無形の道理を指すなり、物是有形のものなれども、借り用ゐて形容したるなり、莊子に道<sub>一</sub>在<sub>二</sub>太極之先<sub>一</sub>とあり、此の太極は一元氣を指して即ち物なり、是れ皆理先物後の説にて、孔孟物先理後の学を修むるものを排斥し居たりしが、何ぞ図らん、宋學者か此の学を窃に遵奉し、理學を唱出し、太極は理なり、陰陽は氣なり、形以上は理なり、形以下は氣なりと、自己の説を以て、周易を誤解し、理と氣を分離し、動もすれは自然の理自然の理と云へり、此の自然の字は、六經になく、老子に始めて見へたる字なり、此を以て其学の金管玉条とせるにても、老莊に淵源したること知る可し、此の学宋元より明の中葉まで、盛に流行せり、然るに此くの如く理氣を分析すれば、議論の上、文章の上、分界判然として、分明なれども、實際に於て、此くの如く分離したるものに非ず、又之を実行するに於て、ひたと差支を生ず、何となれば、無形の理は、人々の想像にて、如何様にも言はれるものなれば、言ふ可くして、行ふ可からざるの理多く、實際に當て差支へて行はれず、何ほと妙理にても、行はれされは、無用の空理なり、王陽明は此に所見あり、理は氣中之条理、及理氣合一と云ふ説を唱へ、始めて孔孟物先理後の正学実用に恢復せり、故に知行合一の工夫を考へ、良知にて知りたる積りの道理も、行ふて差支へるときは、真道理に非ず、又真良知に非ず、真良知にて知りたる真道理なれば、必ず行へるものとし、大学の致知格物を知行合一のことと爲し、致知の知も、物を格すこと能はされは、真に良知を致したるに非ずとて、致知格物必並ひ行はれて、始めて誠意が出来ることゝは

解せり、其後明末は此の学を奉ずるもの多く、吳廷翰と云ふ人も、其一人にて、吉斎漫録を著し、太極は氣にて理に非ずと云ふ説を主張したり、其書か本朝に舶來し、仁斎は之に本つき、一元氣の説を唱へ、南朝頃より徳川氏中葉まで行はれたる宋儒の理學を打破れり、余故に仁斎学は陽明の氣學に淵源すと云ふなり、

（本学文学部教授）